

# 上金遺跡

~~緊急発掘調査報告書~~

**1986**

箕輪町教育委員会

# 上金遺跡

1986

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 橋口彦雄

昭和61年度県費補助工業用地基盤整備事業排水路新設による排水管敷設工事に伴う緊急発掘である。

上金遺跡は大原遺跡群の中にあり町内では第一級の遺跡密集地帯である。本遺跡を含めて、周辺遺跡より今までに貴重な遺物が多数出土している。それらは地域に住んでいた故小川守人氏により収集整理し、博物館に寄贈され保管してある。

調査結果は章を追って明らかにするが、本調査によって、予測していた時期の縄文中期、平安時代の遺構、遺物があった。

調査地の周囲は果樹園であり、調査場所が道路であること、また果樹の出荷時期であることなどから、農家の方々から多くのご協力をいただいた。作業に参加された皆さん、本報告書作成の関係の方々に、厚く御礼申し上げます。

## 例　　言

- 1 本書は長野県上伊那郡箕輪町大字福与367番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和61年9月17日～9月29日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の作成作業を行った。

作業分担は次の通りである。

遺構実測図の整理・トレース 竹入洋子  
土器実測・トレース 竹入洋子  
土器拓影・断面実測・トレース 山内志賀子  
石器実測・トレース 竹入洋子  
拓影図版作製 山内志賀子、柴登巳夫  
写真図版作製 山内志賀子、柴登巳夫

- 3 本書に掲載した遺構・遺物の写真は柴登巳夫・石川寛が撮影したものを使用した。
- 4 本書の執筆は主として柴登巳夫が行った。
- 5 本書の編集は発掘調査事務局が行った。
- 6 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

# 本文目次

題字	教育長	樋口彦雄
序	"	"
例言		
本文目次		
挿図目次		
図版目次		
第I章 遺跡の立地		1
第1節 位 置		1
第2節 地形と地質		2
第3節 遺跡の歴史的環境		3
第II章 発掘調査の経過		5
第1節 発掘調査に至るまで		5
第2節 調査の概要 (調査日誌)		6
第III章 遺構と遺物		8
第1節 遺 構		8
1. 調査範囲と地形		8
2. 住居址		9
第2節 遺 物		14
1. 土 器		14
2. 石 器		21
第IV章 ま と め		25

## 挿 図 目 次

第1図	位 置 図	1
第2図	遺跡周辺の地形	2
第3図	周辺遺跡の分布図	4
第4図	遺跡周辺の地形と遺跡範囲図	8
第5図	第1号住居址実測図	9
第6図	第2号住居址実測図	10
第7図	第1号土括実測図	11
第8図	第2号土括実測図	12
第9図	土 器 拓 影 1	13
第10図	土 器 拓 影 2	14
第11図	第1号住居址出土土器拓影	15
第12図	第2号住居址出土土器拓影	15
第13図	既出土器拓影 1	16
第14図	既出土器拓影 2	17
第15図	出土土器実測図 1	18
第16図	出土土器実測図 2	19
第17図	容器形土偶実測図 (既出)	19
第18図	石器実測図 1	20
第19図	石器実測図 2	21
第20図	石器実測図 3	22
第21図	石器実測図 4 (既出)	23

# 図 版 目 次

- |         |          |
|---------|----------|
| 図版 I    | 遺跡近影     |
| 図版 II   | 住居址      |
| 図版 III  | 調査状況     |
| 図版 IV   | 遺構状況     |
| 図版 V    | 炉址及び埋甕状況 |
| 図版 VI   | 遺物出土状況 1 |
| 図版 VII  | 遺物出土状況 2 |
| 図版 VIII | 出土遺物 1   |
| 図版 IX   | 出土遺物 2   |
| 図版 X    | 出土遺物 3   |
| 図版 XI   | 出土遺物 4   |
| 図版 XII  | 調査状況 1   |
| 図版 XIII | 調査状況 2   |
| 図版 XIV  | 調査状況 3   |

# 第1章 遺跡の立地

## 第1節 位置（第1図）

上金遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字福与367番地他に所在する。同遺跡は大原遺跡群を構成する遺跡の一つで、周辺には、矢田、矢田尻、上ノ山、黒津原などの遺跡が密集する地帯である。遺跡の位置する一帯は約9ヘクタール余の平地で、畑地及び一部山林となっている。眼下の天童川面との比高は30mを計り、標高は695mである。

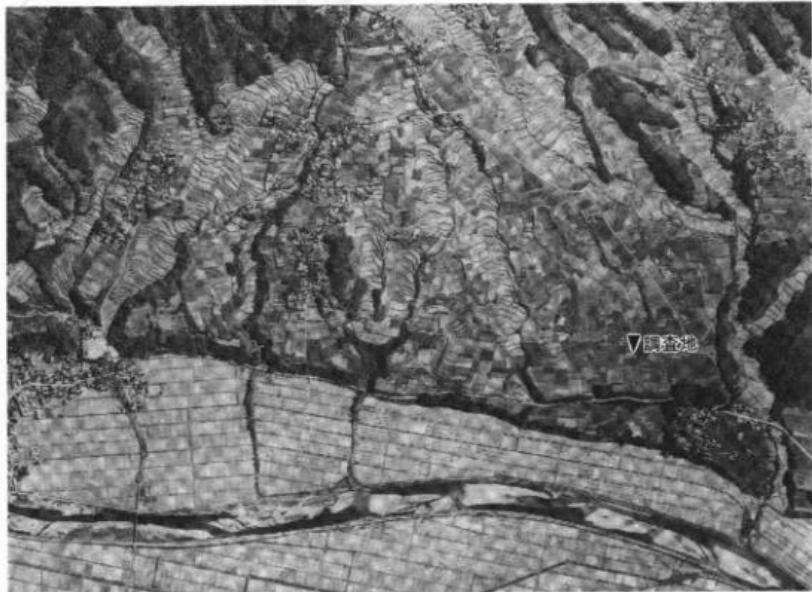


第1図 位置図

## 第2節 地形と地質

箕輪町は、南北に流れる天竜川によって竜西、竜東という二つの地域に分けて呼ばれている。天竜川の右岸（竜西）では、経ヶ岳山麓から東方に流下する小河川、即ち、帶無川・大泉川・深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。複合扇状地は礫・砂・粘土・ローム等が相重なって堆積し東方に向かって緩やかな傾斜をしている。左岸（竜東）は竜西地帯とは対象的に扇状地や段丘等の傾斜は急で小規模なものである。背後にすぐ山を控え、それより流れ出す河川は小さいが数多くなっている。この小河川によって段丘は刻まれており、ところによって舌状台地を形成している。又、山からの急な出水の繰り返しによって天井地形が見える。

大原地帯はこのような竜東地帯にあって広い面積を有する方であり、西南に傾斜した地形は古代人の生活の場として最適な所であったと思う。又遺跡の近くの扇央部には湧水が出るところがある。これはかなり急な扇状地にしては扇端部によく見られることであるが、めずらしいことである。遺跡は標高700m地帯に広がり、天竜川氾濫原との差がかなりある。竜東はほとんどがこのような地形であるが、この小扇状地や段丘上に数十ヶ所を越す遺跡があり、箕輪町では最大の遺跡密集地帯である。



第2図 遺跡周辺の地形

### 第3節 遺跡の歴史的環境

天竜川の東岸に河岸段丘と扇状地とが独特の地形を作り出し、居住性に富む地形を利用し、各所に遺跡の密集地帯が形成されている。箕輪町内は先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その中で代表的なものを挙げると、上伊那郡唯一の前方後円墳「松島王墓」があり、古くから多数の埴輪片が出土している。(注1) 王墓と天竜川を隔てて対立する台地には、信濃源氏発祥の地といわれる上の平があり、(注2) その南には長岡古墳群が位置している。

次に町内の遺跡分布を概観するとき、それを次のように4類に分けて考えることができる。

- 第1類 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡。
- 第2類 天竜川の西岸の段丘上に列状に並ぶ遺跡群。
- 第3類 天竜川の東岸の段丘上、扇状地上に立地する遺跡群。
- 第4類 低位段丘（沖積面）の遺跡。

福与上金遺跡第3類遺跡群中の一つである。第3類は、天竜川東岸に最高の密集地帯を形成し、それらは段丘面や、小扇状地に集中している。この中でも長岡地籍と福与上金地籍は古くから多数の遺物を出土している。(注5) 近接する遺跡として北垣外、矢田尻、上の山や黒津原、矢田の各遺跡が上げられる。これらはほとんど複合遺跡であり、古代人にとって非常に居住性に富んでいた地域であることをうかがうことが出来る。

又、第4類 低位段丘にある遺跡として代表的な箕輪遺跡と天竜川東岸の遺跡関係も無視することの出来ない問題といえる。

#### 注

- (1) 出土遺物の代表的なものは箕輪町郷土博物館に展示
- (2) 上の平城址については、昭和48年刊、長野県史蹟天然記念物報告書所載「上の平城址」市村成人著の報告文にあり。
- (3) 信濃7巻2号に「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」藤沢宗平氏の報告書あり。
- (4) 箕輪町教育委員会による報告書「木下北城遺跡」(林茂樹氏担当)在り。弥生後期の大集落の一画と、中世火葬墓群の発見は注目されるものである。
- (5) 先年この地から上伊那地方では初めてといわれる「土笛」が出土している。



- ①上 金 ②北 城 ③南 城 ④猿 来 ⑤藤 山 ⑥箕 輪 ⑦王墓古墳  
 ⑧中 道 ⑨五 輸 ⑩並木下 ⑪一 の 宮 ⑫中曾根北 ⑬向 墓 外 ⑭山 の 神  
 ⑮天 但 ⑯上 人 塚 ⑰埴 外 ⑱内 城 ⑲大 泉 ⑳宮 の 上 ㉑上 ノ 林  
 ㉒北 墓 外 ㉓黒 津 原 ㉔上 の 山 ㉕矢 田 尻 ㉖矢 田 ㉗澄 心 寺 下 ㉘御 射 山

第3図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町福与地籍の天竜川左岸台地の畠地帯である。この一段上の東側台地は町が所有していた雑種地であった。ここは小高い丘状の部分や、湿地状の谷、山林などである。ここを町開発公社が造成して工場を誘致する計画を進めた。造成を進める段階において、一帯の雨水や、生活雑排水を処理しなければならない、そのため本遺跡内を通過して配水管の敷設工事を実施することになったのである。工事の正式名称は昭和61年度県補助工業用地基盤整備事業排水路新設工事と呼ぶ。8月末から地元地検者との協議を進め、62年3月末に完成という計画になった。この工事は上金遺跡内の道路に添って施工されるため発掘調査を実施することが必要である。そのため教育委員会と、町開発公社と協議を重ね9月17日から発掘調査を実施するはこびとなった。

#### イ) 調査の概要

- ・遺跡名 上金遺跡
- ・所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字福与367番地他
- ・発掘期間 昭和61年9月17日～9月29日

#### ロ) 調査団

調査団長	樋口 彦雄	(教育長)
調査担当者	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸委員
調査員	石川 寛	"
調査員	竹入 洋子	"
ハ) 事務局	樋口 彦雄	箕輪町教育委員会教育長
	北川 文雄	" 社会教育課長
	太田 文陳	" 社会教育係長
	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸委員
	石川 寛	"

- #### 二) 調査協力者
- 山内志賀子 唐沢清人 山岸 工 井上 武雄 小林信義  
赤沼悦子 清水節治 野沢徳章 野沢良久 藤森秀男  
岡 正 那須房江 那須喜佐雄 松本道枝 赤沼雄太  
中村久志

## 第2節 調査の概要（調査日誌）

9月17日（水）

工業用地基盤整備事業に伴い、上金地区の発掘調査を実施することとなった。周囲には果樹が多く、その出荷時期に差しかかったため、道路状況などに注意をしながら計画を進めた。

午前中にテント設営と、作業道具等の運搬を行う。



9月18日（木）

調査実施の場所は、使用中の農道である。道に添って排水管を敷設する工事に先立って発掘を実施するのである。2m巾で約200mという調査区間であるため、工区を二つに分けて実施した。表土を約30センチ程度機械により掛けし、その後を手堀りで進めた。東側を約100m機械掛け土した。32区に落ち込みが確認された。手堀りをしている各区から縄文時代中期及び、平安時代の遺物が、確認され始めた。



9月19日（金）

教育委員会事務局の都合で、神事を本日実施した。最初に調査を始めた1区～20区までの40m間を手堀りにより精査を実施。第19区に土器出土。32区から灰釉蓋が完形で出土する。



23～24区を中心とした落ち込みがあるように思える。

9月22日（月）

22～24区において落ち込みが確認されているので南側へ拡張、18区に土括確認、19区に焼土が検出された。18区に確認された土括を手堀りし、土層断面の実測。22～24区の落ち込みを調査したところ平安時代の住居址となる。



9月24日（水）

16、17区を中心に縄文時代中期（曾利II式期）の土器が集中して出土、住居址になるものと推測される。平安時代と確認された住居址を第1号住居址とする。遺構等が確認されなかった1～13区間に埋めもどし作業。

土塁を精査、実測、写真撮影。

第2調査区の東側に残っている桑の木などを切り取る作業を行う。機械により表土を排土する。作業を第2調査区に進める。

9月25日（木）

16～17区に落ち込みが確認されていたが、ここを第2号住居址とする。第1、2号住居址共に北側へ拡張、第1号住居址の北壁がはっきり確認される。カマドが有するものと考えるが、今日までのところ未確認である。35～43区排土。

第2号住居址ベルトを残し精査。

9月26日（金）

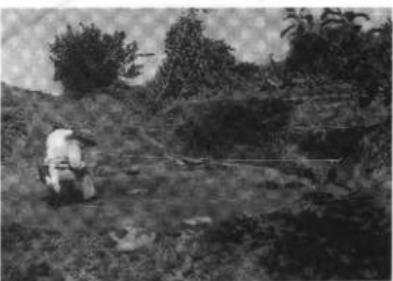
第1、2号住居址を中心に作業を進める。第1号住居址を清掃、写真実測、住居址の実測を実施、カマド確認されず。

9月29日（月）

第2号住居址ベルトをはずし、炉址の調査、第2調査区埋めもどし、第2調査区には遺構、遺物の検出確認されず、全体測量を実施。

9月30日（火）

第2号住居址の埋甕調査、住居址実測、午後全体埋めもどし作業、テント片付、作業を本日で終了とする。

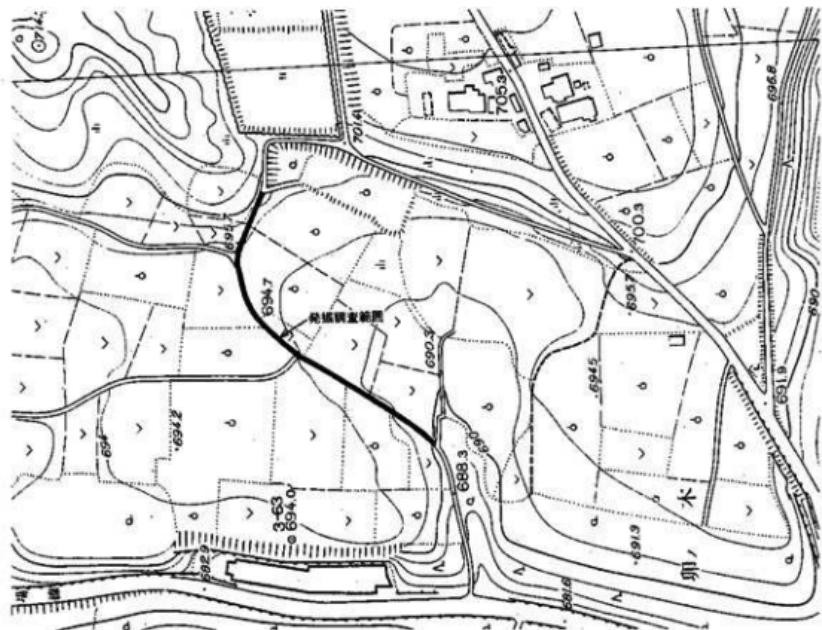


## 第Ⅲ章 遺構と遺物

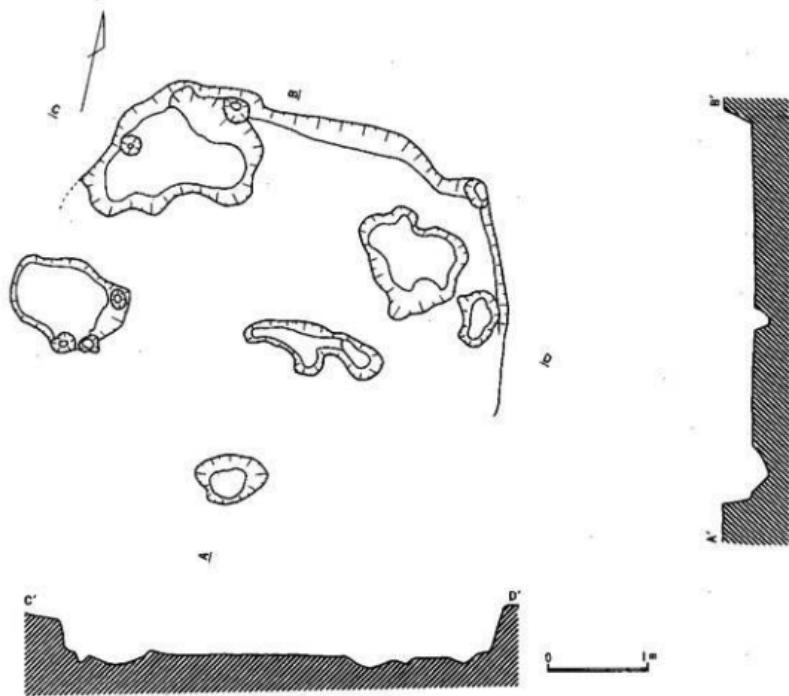
### 第1節 遺構

#### 1 調査範囲と地形 (第4図)

天竜川左岸は山地が張り出しているため、竜西のような広い扇状地形は見られない。とりわけ南部地域は傾斜面が多く、耕地や宅地に至るまで階段状を呈する地形が見られる。この地域は伊那市と境する瀬波川、続いて鬼沢川、吉田ヶ沢川、判の木沢川等が並んでいる。西流するこれらの小河川は流路が短いが急流が多く、なかには天井川を形成しているものも見られる。調査範囲は排水管を敷設する工事であるため、巾2mと狭いが長さは200m近くを有している。排水管は道路状に敷設するため、発掘調査は道路を掘り返す状況である。表土を30~40cm耕土するとローム層が検出され、住居址などの遺構はこのローム層に掘り込んで構築されている。



第4図 遺跡周辺の地形と調査範囲図

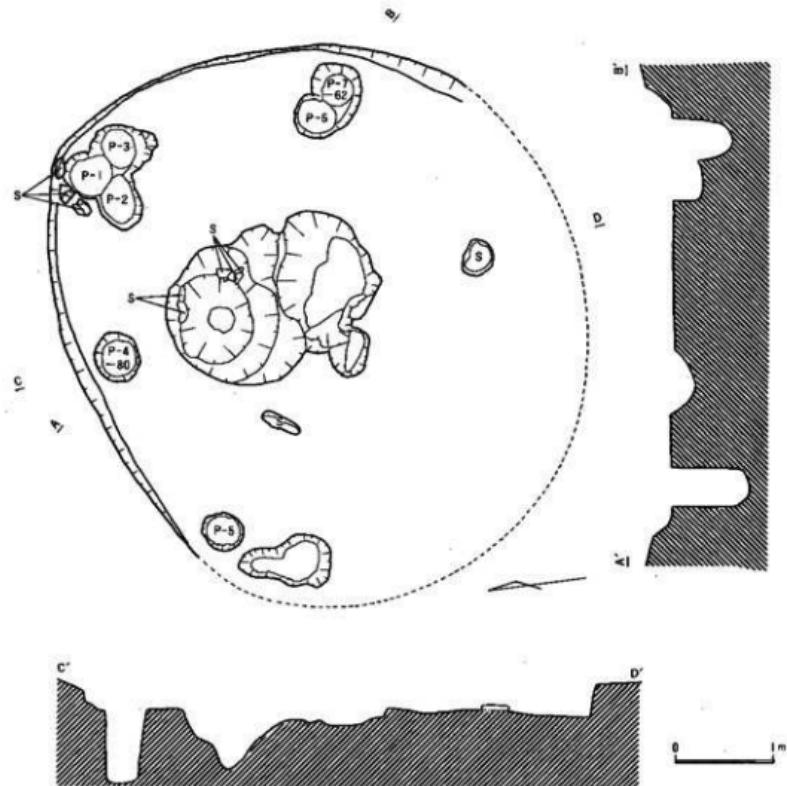


第5図 第1号住居址実測図

## 2 住居址

### 1) 第1号住居址（第5図）

第1号住居址は第1工区の第22～24区を中心にして検出された住居址である。調査範囲は巾2mであるため、住居址の発見があっても完掘は不可能である。調査範囲は住居址を東西に横切るように通過している。そのため、東西の壁の一部がまず確認された。この状況では住居址の概要さえも不明ということになり、南北両側の土地所有者の了解を得て一部拡張をした。それによって北壁の状況を確認することができた。住居址プランは推定で南北約5m、東西4.2m前後の偶丸長方形を呈するものと思われる。カマド、主柱穴などの内部施設は不明である。壁はやや急な斜壁である。住居址はローム層を掘り込んで構築されており、床面は一部を除いてやや軟弱である。出土している土器類は土師器が多く（第15図1～3）10世紀中ごろ（国分期）のものが多い。

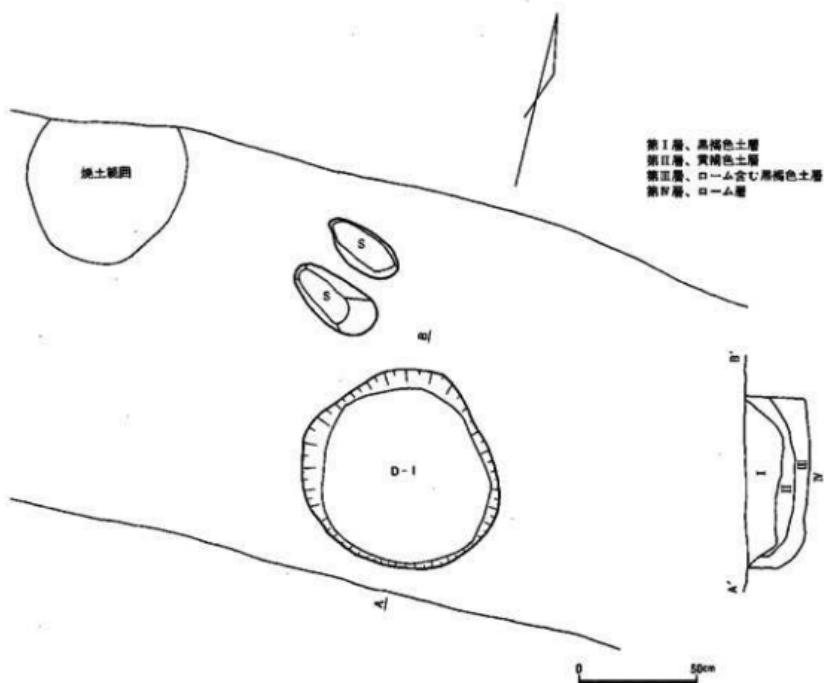


第6図 第2号住居址実測図

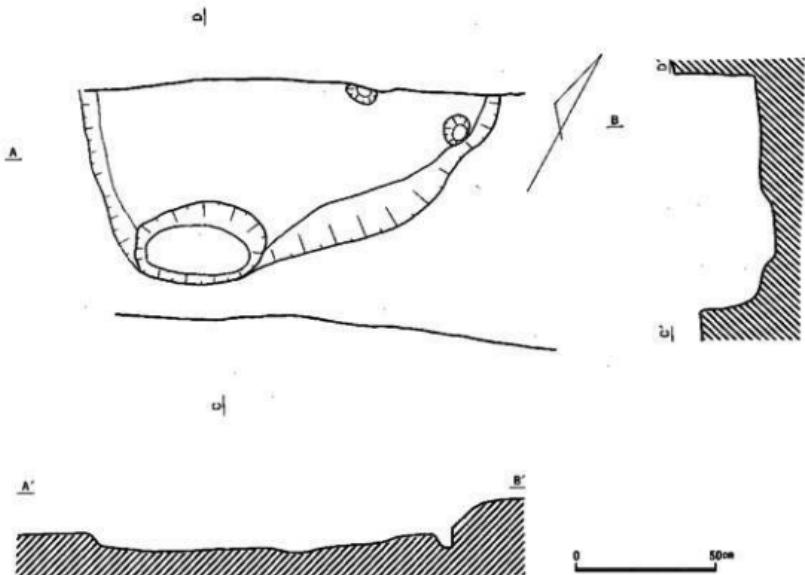
## 2) 第2号住居址（第6図）

本住居址は第16、17区を中心として検出された。調査開始直後から、この周辺から縄文土器片が多数出土していた場所である。住居址の東北は小高い丘状になっており、その傾斜が下の平らな面と接する地点に住居址が位置している。ここも第1号住居址同様に調査区が住居址の中央を東西に横切る状況であった。そのため南北に一部拡張し、住居址のプランをほぼ検出することができた。しかし、北壁は急な大きな壁になるため拡張が困難であり、一応図上では壁のような表現をしているが20cm前後、図より張り出すものと考える。南壁及び西壁は耕作により攪乱

されており、床面及び壁は推定プランである。主柱穴と思われるピットがP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>まで確認された。このピットの配置状況から考えるとP<sub>5</sub>とP<sub>7</sub>の間に少なくとも2か所の主柱穴が推定されるが、耕作による搅乱で床面が切り取られて不明である。またP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>～P<sub>7</sub>の状況及び中央の炉址の状況から推定し、この住居址とほぼ位置を同じくして住居址が構築されていたと考えられる。これは埋甕を振ったところ、すぐ横から15図の9に示す土器が出土している。この土器は下小野式に比定されるところから、第2号住居址より古い時期である。P<sub>4</sub>の前には直径1.2mほどの円形掘り込み炉がある。床面からの深さは60cmを計り円錐状に中央が深くなっている。炉址の覆土中から土器片が多量に出土した。この土器片は縄文中期後葉の曾利II式の土器である。炉址の南側に平石が位置している。この石は埋甕の蓋石であり、床面下には埋甕が一個体完形で埋められていた。本住居址はこれらの出土土器から見て曾利II式期の住居址と考える。



第7図 第1号土拵実測図



第8図 第2号土塙実測図

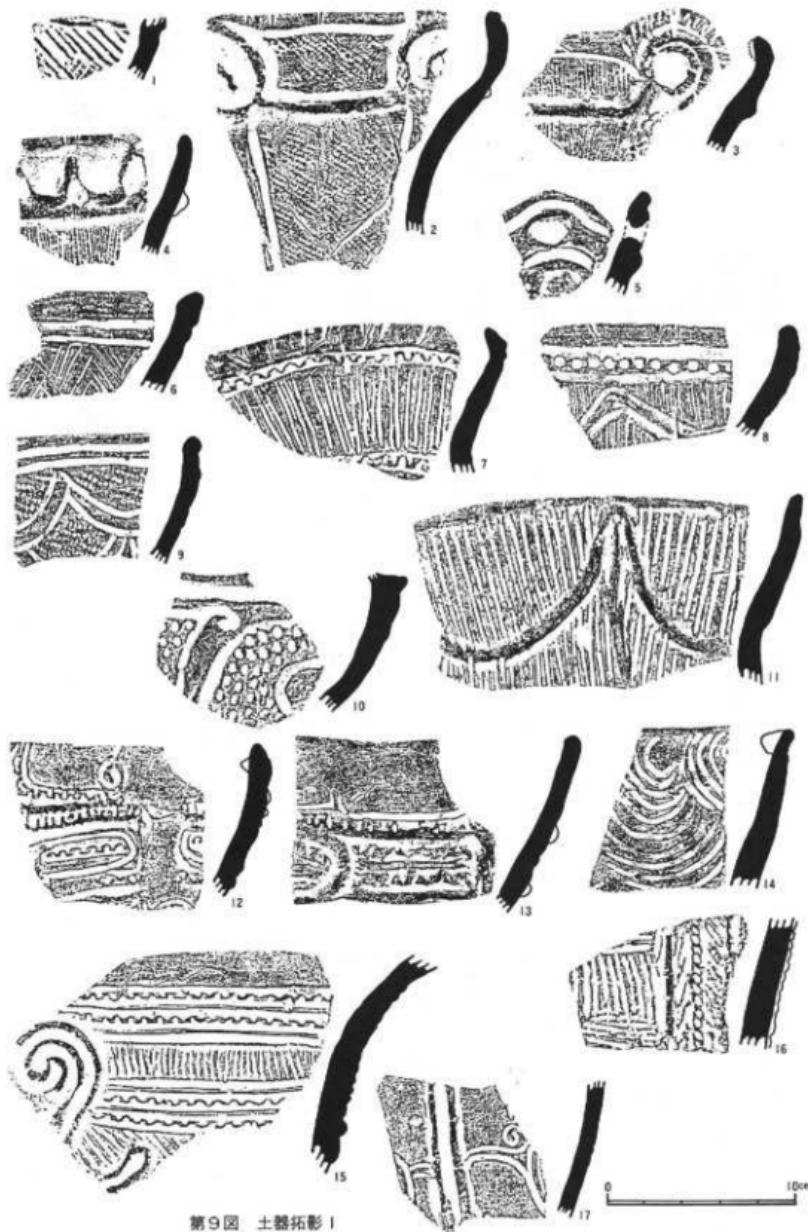
### 3) 土 塙

#### イ) D-1 (第7図)

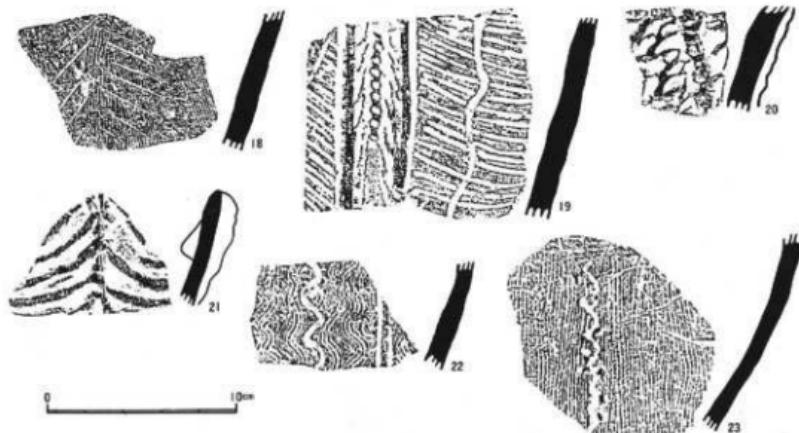
第2号住居址の西側、第18区に土塙が検出される。直径80cm余ではほぼ円形を呈し、落ち込み確認面よりの深さ27cm前後である。覆土は三層に分かれ、壁はほぼ直壁に近い。土塙の北側には長方形の石が二つ並び、作業台とも考えられる。また19区には焼土が同一面から検出されている。第2号住居址に付随するような施設と推測される。周囲にはこの土塙と同様なものが位置していると考えられる。

#### ロ) D-2 (第8図)

第32区を中心としてやや深い落ち込みが検出された。ここからは奈良時代末期頃の須恵器の蓋が出土(第15図-7)している。住居址になるのではと周囲を調査したが、落ち込み面の床面とは決めかね、また、壁やプランの状況から判断し土塙とした。北側の部分を拡張して完掘すれば状況が変化する可能性も考えられる。本遺跡より一段下の北垣外遺跡からは奈良時代の土師器が多量に出土していることから考え、同時代の遺構も十分存在が推測される。



第9図 土器拓影 I



第10図 土器拓影 2

## 第2節 遺 物

### 1. 土 器 (9、10図)

発掘調査区全体を通して出土した縄文土器片を拓影として第9、10図に現してみた。この中には第2号住居址内出土の土器片も含まれている。(住居址内出土の土器は第12図にまとめ、これは別にしてある。)

1は縄文前期の特徴を示す文様が施されている。土器片は口縁部に近い部分と見られ、竹管による平行沈線の上にソーメン状の細長い粘土ひもをななめに貼付け、格子状に構成されている。他の土器片より胎土が密で、全体に赤褐色を呈している。

他の土器片はほとんど曾利期の土器である。(一部井戸尻期を含む)先行する井戸尻器に比べ把手や文様が簡略化されている。12、13、15などは曾利II期の特徴を見ることができ、太い隆帯を貼付け、それに添って先の尖った工具で連続した列点文を施している。また唐草文系の文様が多く見られるのもこの時期の特徴である。これらの土器は埋甕として様いられることが多い。土器片も大きく厚手で、胎土中には多量の金雲母と小さな石英粒を含み、焼成は良好である。15は土器の厚みが12mmと厚く赤褐色を呈し、内面は極めて美しく磨いて仕上げている。第10図19は深鉢形の大形土器の胴下部である。垂下する隆帯の間を埋めつくすように綾杉状文が施されている。この土器は曾利II期に比定される。土器内面には煤が付着し、煮炊きに使用したことを感じる。



第11図 第1号住出土土器拓影



第12図 第2号住炉址出土土器拓影

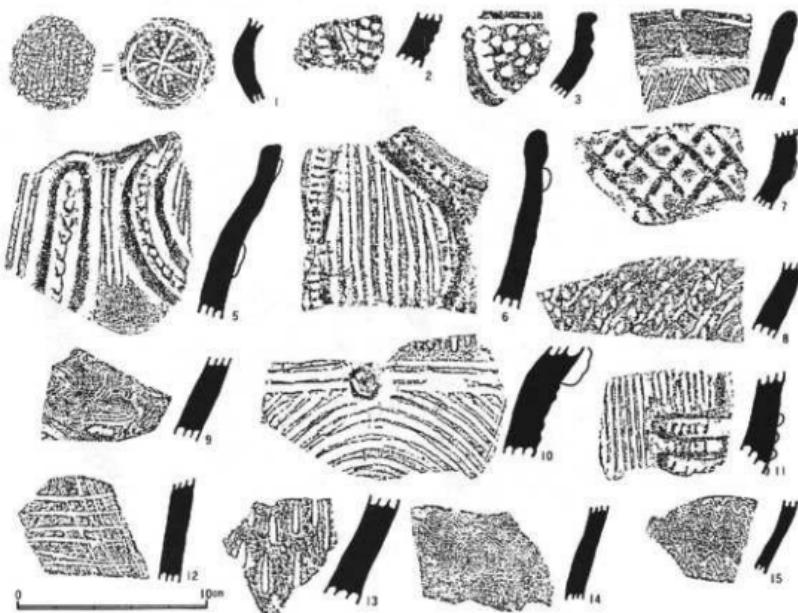
#### イ) 第11図土器

第11図には第1号住居址から出土した土器器片の拓影を示した。1は小型甕の口縁であり“くの字状”を呈し外反している。内外面共に櫛状工具で整形している。器厚は4mm前後であり、焼成はあまり良くない。胎土中には石英粒を多量に含んでいる。2、3は長胴甕の胴部である。内面には輪積みの痕をはっきりと残し、土器表面は櫛状工具での整形痕を残している。胎土は密で、金雲母を含み、焼成は良好である。国分期の土器である。

#### ロ) 第12図土器

第12図には第2号住居址の炉址内から出土した土器を示した。1は曾利II式期の特徴そのもので、口縁が内側にわん曲する形を示している。口縁は平縁で大型の深鉢形土器である。太い隆帯を直線あるいは渦巻き状に貼り付け、それに添うようにして、列点文を配している。胴下部は隆帯または、沈線で唐草文様を描き、その中を綾杉状沈線文が施文されている。

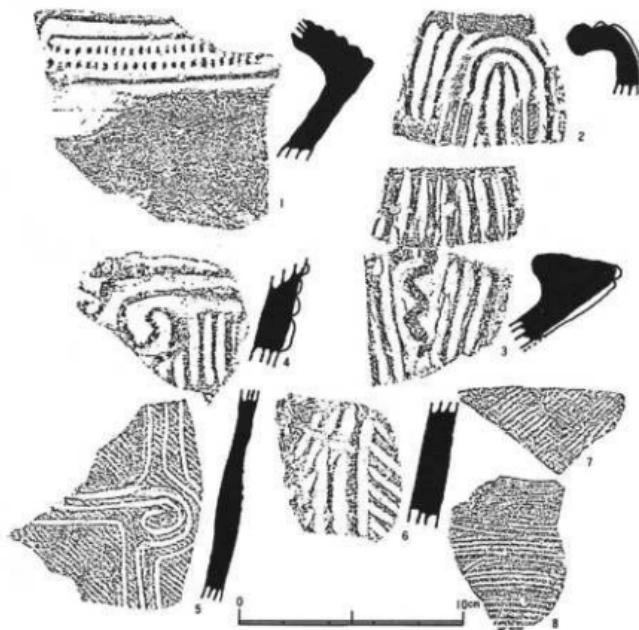
2は小型の深鉢形土器で、口縁の直径は推定15cm程度である。口縁部が外反し、胴部がくびれる形を示している。口縁部に平行して三本の沈線と二列の列点文が施されている。器面は全体に繩文を施し、その上を沈線でわずかな文様を描いている。内面には輪積痕と整形痕を残している。喫煙式土器の特徴を示している。



第13図 既出土器拓影(I)

### ハ) 第13回土器

上金遺跡は過去において、土器・石器共に多量の遺物を出土している。ここではその中の一部を拓影として示した。これらの遺物はすべて故小川守人氏の収集によるものである。1は円板状で灰白色をした土器片である。表裏二面には、径1.5mmほどの小さな竹管による連続刺突文様と、竹管の背で押し引きをした爪形文が施されている。土器片というより、何かの土製品の一部ではないかと感じられる。きわめて密な胎土で焼成は良好である。2、3は厚手土器の一部である。隆帶を貼り付けた部分の他は器面を大きく刺突している。胎土は極めて荒く、焼成も良くない。曾利I式期にこの特徴を持つ土器がある。4は口縁部に無文帯を残し、その下部に半割竹管による平行沈線文が施されている。中期初頭の土器である。5～7は曾利I～II式期の特徴が見られる土器で、いずれも大型深鉢形土器の一部である。太い隆帶の貼り付けと沈線の組み合わせによる文様構成である。14、15は弥生式土器で、器面にはくしがきの波状文が施されている。14は胎土は荒く焼成もあまり良くない。15は胎土は極めて密で焼成も良好である。



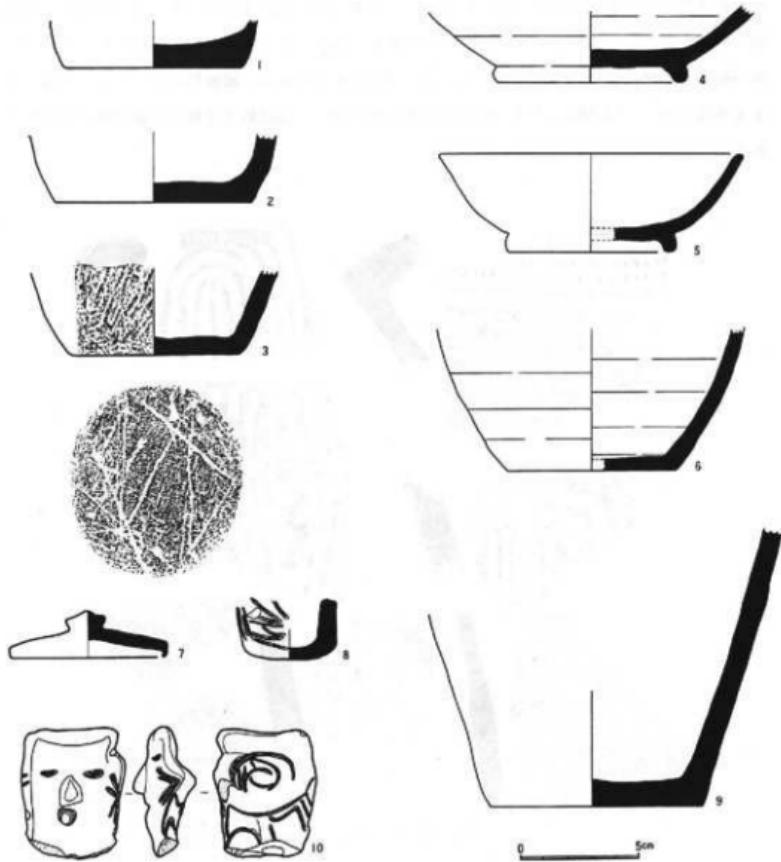
第14回 既出土器拓影(2)

## 二) 第14図の土器

これも既出土器である。1は浅鉢形土器の口縁部片と推測するが、口縁がくの字状に強く折り返され、その上に半割竹管を施文工具とした文様が施されている。金雲母を多量に含み焼成は良好である。3～6は縄文中期後半曾利期の土器である。7、8は土師器で表面を櫛状工具で整形している。

## 木) 第15図の土器

ここでは出土した土器類で実測可能なものを図示した。4～6は既出遺物である。1～3は第1号住居址から出土した土師器である。いずれも底部であるが、1は底面を極めて、丁寧に



第15図 土器実測図 I

磨いている。何かの目的をもって行ったものと推定される。2は器面を刷毛状工具で調整している。胎土は荒く焼成は中位である。3は器面を櫛状工具で整形している。底面は木葉底になっている。いずれも国分期で10世紀の土師器と思われる。4、5は灰釉陶器の壺である。付高台で、底部は回転糸切りになっている。10世紀の中頃と考える。6は須恵器の甕底部である。同じく回転糸切りである。時期も同様である。7は須恵器の蓋で、釉は自然釉である。奈良時代末期ころのものであろう。8は手挽土器である。9は第2号住居址床面下から出土したもので、これについては第2号住居址にて記した。10は板状土偶である。頭部のみであるが、第2号住居址内出土である。

#### ヘ) 第16図の土器

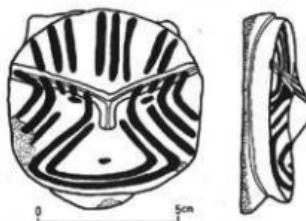
1は第2号住居址内から出土したもので、石蓋付きの埋甕である。器高36cm、口縁部の径26cmを計る。口縁の一部分が欠損しているが、他は完形である。口縁が平らな平縁の深鉢形土器で、曾利II式期の土器である。2は上図の1の土器内に入っていたものである。埋甕は埋葬施設として考えられるので、小甕に何かを入れ、死者と共に埋葬したものであろうか。

#### ト) 第17図の土器

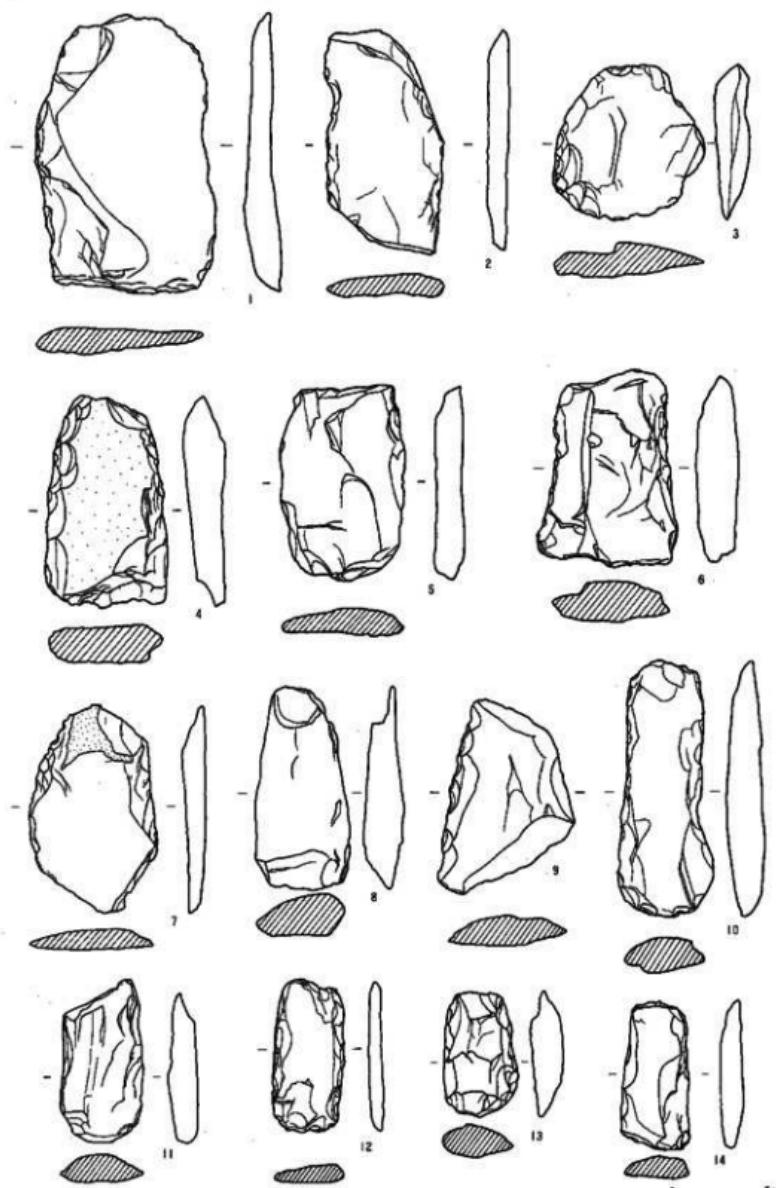
これは既出土器で、容器形土偶の顔面部である。残在部の土器円弧から推定して、土器の直径は20cm程度である。6×7cmの梢円形を呈した顔面部は眉と鼻を隆起で表し、目と口は刺突で表現している。この顔面の大きな特徴は沈線による文様である。これを刺青と考える人もおり、そう考えられないこともない。町内においては他に類例を見ない出土遺物である。



第16図 土器実測図 2



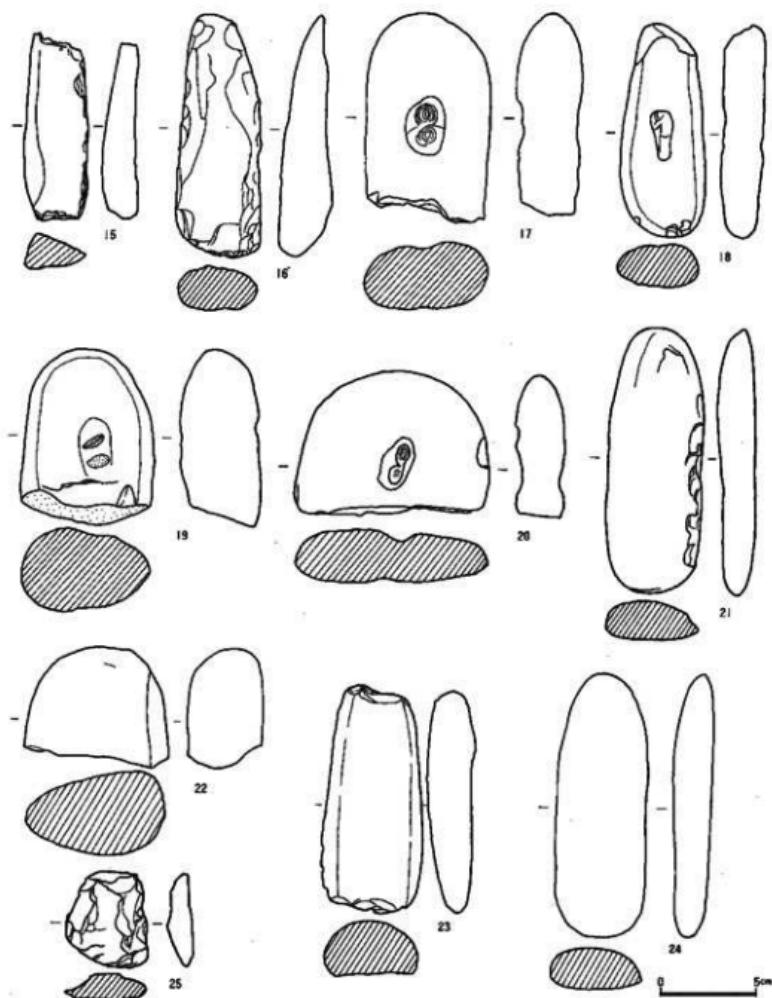
第17図 容器形土偶実測図(既出)



第18図 石器実測図(1)

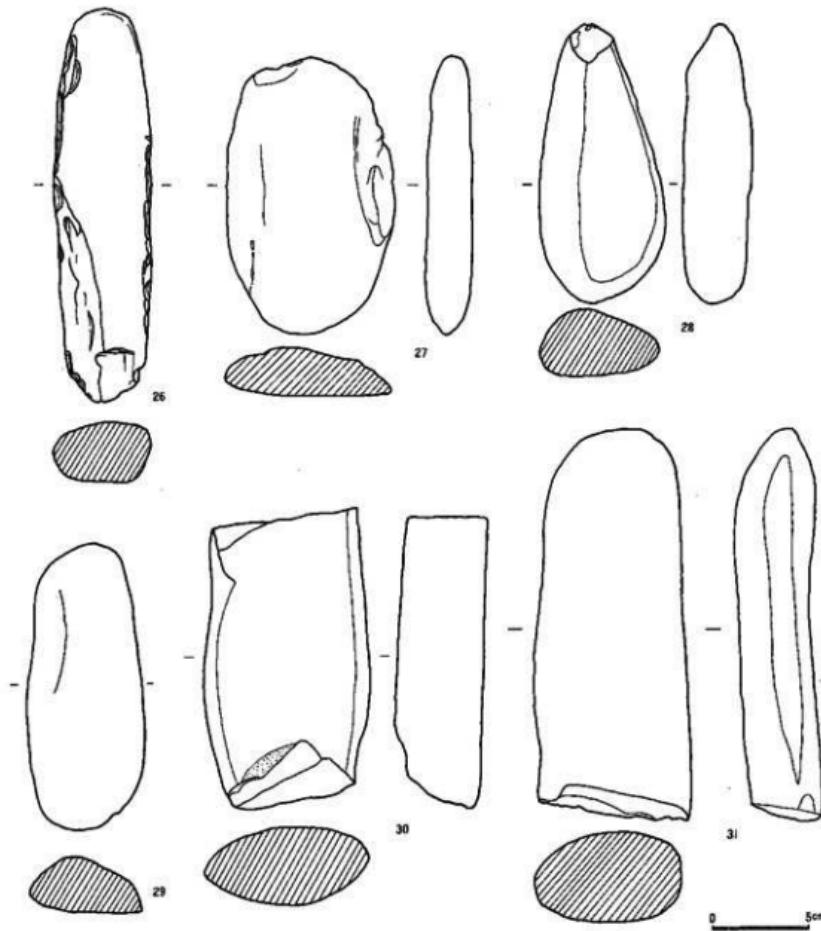
## 2 石 器 (第18, 19, 20図)

本調査における石器の出土数は31点を数えた。それを大別すると次のようになる。最も多いものが打製石斧で17点、磨石が5点、圓石が4点、敲石が4点、チャート製のスクレイパーが1点となっている。打製石斧の中には一部分を磨いてあるものが2点含まれている。

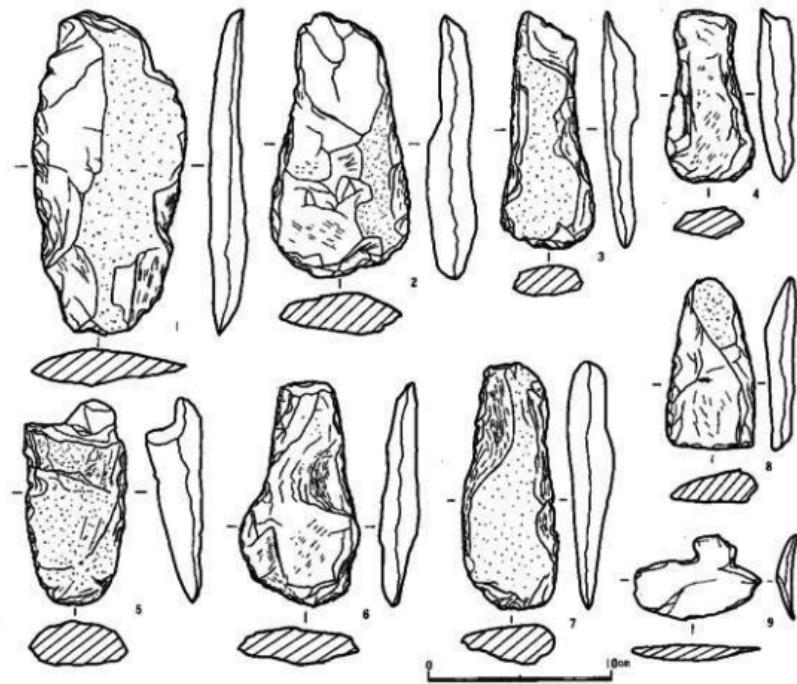


第19図 石器実測図(2)

石質は粘板岩、砂岩、硬砂岩、領家變成岩、安山岩、チャートなどである。打製石斧において、母材のどの部分を利用して製作しているかについて観察した結果、母石の芯を利用しているものが6点、片側を利用しているものが11点であった。形状はほとんどが短冊型で、撓型を呈するものは数少ない。全体として小型のものが多く、使用中での欠損品と思えるものが4点ほど見られる。また18図の3、7などは刃部の状況から考え、横刃形石器として使用されたとも



第20図 石器実測図(3)



第21図 石器実測図(4) (既出)

考えられる。10は刃部が磨耗しており、使用の多かったことが推測できる。また胴上部の側縁も磨耗しており、これは着柄の紐がかりによるものと思われる。全体的に打製石斧は製作が荒く感じる。4点出土した凹石はすべて表裏二面に凹が付けられている。17は凹部がロート状になっており、これは舞錐のおさえ石と考えられる。19、20は打痕点が比較的一点に集中している。19は凹孔が浅く、20は深くなっている。18は打痕点が一点に集中せず不整然な凹孔となっている。

次に磨石であるが、20図に示すとく大型のものが多い。30、31は折れているため全体の大きさは不明であるが、敲石としても使用したものと考えられる。

敲石は、手ごろな形の自然石を利用している例が多い。使用部位は上下端部で、変形している石器が多い。25はチャートのスクレイパーで、刃部は二面が考えられる。やや厚刃であるが調整して刃部を形成している。

イ) 第21図の石器（既出）

上金遺跡から出土している石器類は非常に多く、集められただけでも数百点に及んでいる。ここではそのうちの、ごく一部を実測して示した。ほとんどが打製石器である。石質は前述した内容とほぼ同様である。9点の石器のうち8点までが母石の側縁を利用している。着柄部の磨耗が目立つ石器が多い。9は横刃形の石匙で、刃部を下端に鋭く作り出している。上部のつまみ抉部も磨耗痕が見られる。これはほんの一例の石器であるが、他の既出石器についても分類等により整理を進めなければならない。

## 第 IV 章 ま と め

天竜川左岸の地形は、山地がすぐ背後に張り出し、急な傾斜地が多い。竜西のような広い平面的な扇状地形とは対象的である。とりわけ南部地域は傾斜が強い一帯である。本遺跡が位置する場所は、大原遺跡群と呼ばれる遺跡地帯の中にある。この地域は南から伊那市と境する瀬沢川、続いて兎沢川、吉田ヶ沢川、判の木沢川、鎌倉沢川、玄ヶ沢川そして宮沢川と並んでいる。西流するこれらの小河川の流路は短いが急流が多く、なかには天井川を形成しているものも見られる。これら的小河川によって小台地や扇状地が形成され、その上に遺跡が位置している。大原遺跡群の中には、本遺跡の他に、上の山、矢田、矢田尻、黒津原、北垣外、福原等多数の遺跡が存在している。一帯は果樹園が多く、大きく地形変更がなされていないため遺跡の保存状況は比較的良好と思われる。

さて、排水管敷設工事という事業に先立って実施された本遺跡の発掘調査は、2m巾で長さ200mと言う細長い、トレンチを設定したような調査であった。面的な状況においては完全に把握することはできなかったが、調査区内におけるある程度の状況は推測することができた。

それは以前において、一帯を限無く表面採集をされた小川守人氏の収集資料と一致する内容であった。

調査結果としては縄文時代中期後半の曾利II式期の住居址と平安時代中ごろ（10世紀）の住居址がそれぞれ1ヶ所ずつで、それに伴う遺物が出土している。調査の結果において触れたが第2号住居址が造られる以前に、ほぼ位置を同じくして、住居があったことが考えられる。主柱穴の位置もほとんど同一であり、地形的に住居を設定する場所というものは、ほぼ同じような場所に目をつけるものだということがわかる。一帯には縄文早期から平安時代にかけての住居址が非常に多く位置しているものと推定される。特に、早期押型文土器、前期の土器を多量に出土する地帯である。それ故ここ一帯は地形変更などされることなく、このままの状況で後世に伝えたい場所である。箕輪町内における最大の遺跡地帯といえるからである。

本調査によって、これまでに収集されている出土遺物の内容を証明する遺構が確認されたことは意味あることであった。

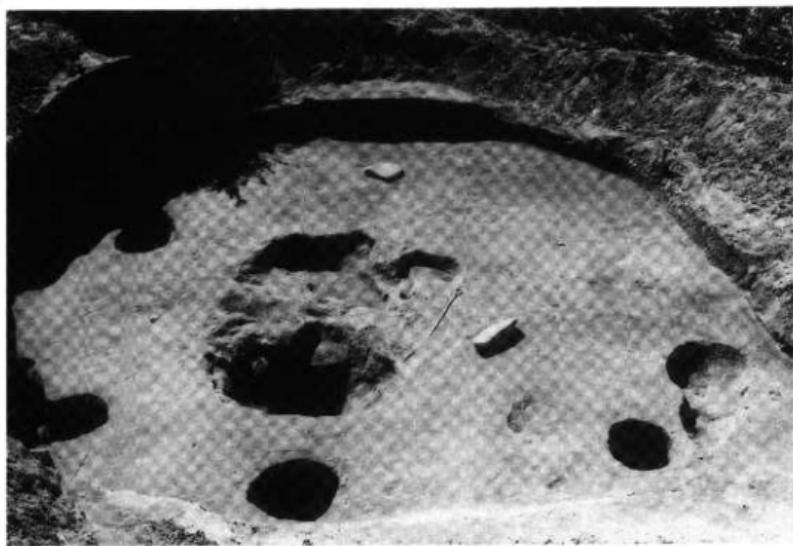
調査を通じて協力いただいた作業員の皆さん、果樹の出荷時期にもかかわらず、便宜を計つていただいた地元の方々に心からお礼を申し上げます。



# 図 版



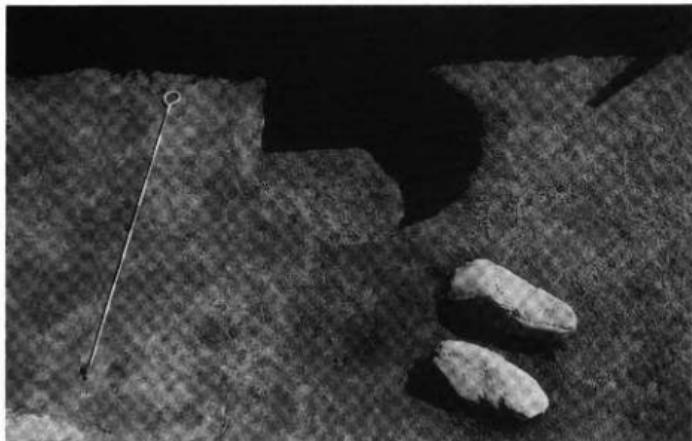
遺跡近景



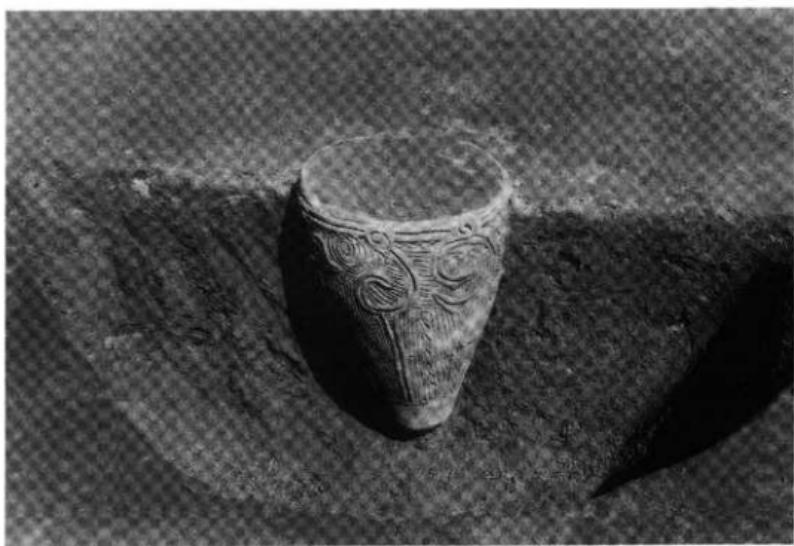
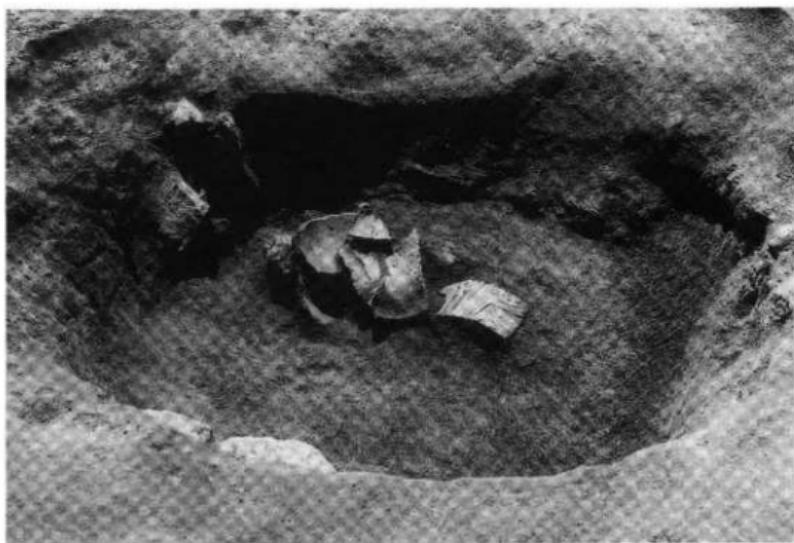
住居址



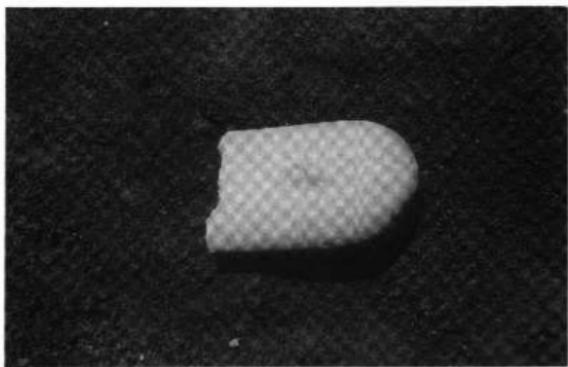
調査状況



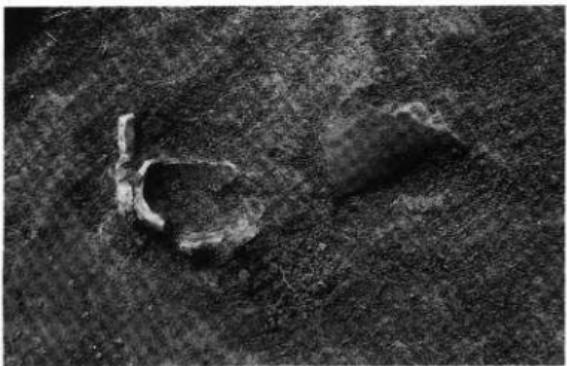
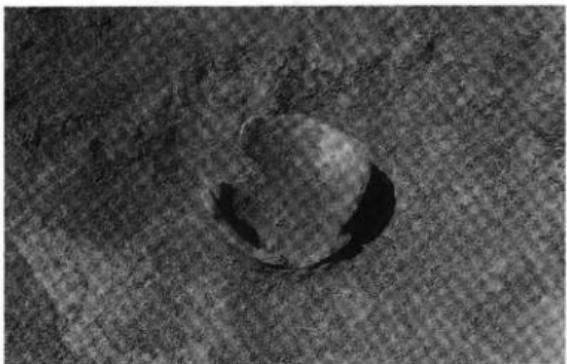
遺構状況



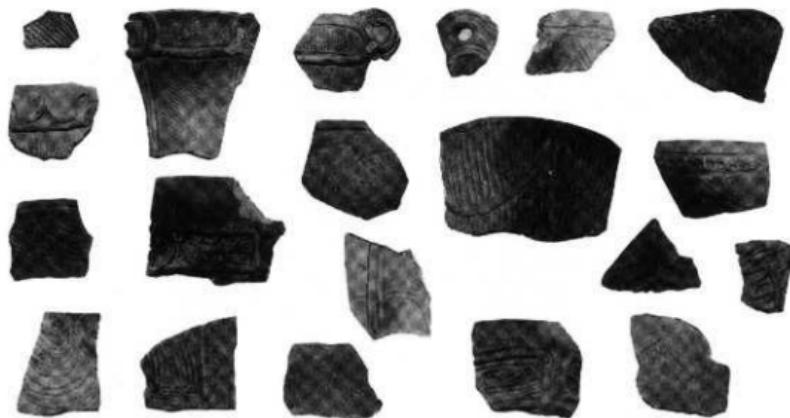
炉址及び埋蔵状況



遺物出土状況 I



遺物出土状況 II



グリッド



H-I 住



J 2 住炉内



既出  
出土遺物 I



出土遺物 II



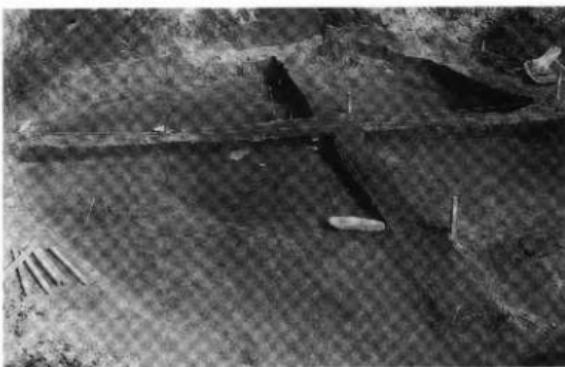
出土遺物 III



出土遺物 IV (既出)



調査状況 I



調査状況 II



調查狀況 III

# 上金遺跡

長野県上伊那郡箕輪町  
緊急発掘調査報告書

昭和62年3月31日 印刷  
昭和62年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市(株)小松総合印刷所